

地域において働き盛り世代が 青少年の育成活動に参加する意義

石橋 鮎美・有田真由美*・板垣美由紀*²・稲岡奈なえ*³
岩崎 寛子*⁴・岩崎 由恵*⁵・大塚 蓉子*⁶
片山 周子*⁷・上平瀬さおり*⁸
久保田恵理*⁹・吾郷美奈恵

概 要

本研究の目的は働き盛り世代の住民が地域において青少年の育成活動に参加する意義を明らかにし、これからの地域づくりについて考察することである。地区の青少年育成部の活動に今年度参加した9名(全員)を対象に構造化インタビューを行った。また、フィールドワークとして青少年育成部の活動に参加した保健師養成課程の学生10名が、その特長についてラベルに書き出した。KJ法を用いて分析した結果、活動は対象となる子どもだけでなく、地域住民や活動する働き盛り世代にも良い影響を与えていた。このような活動は今後の生き生きとした地域づくりのきっかけになると考えられる。

キーワード：働き盛り，地域，発達課題

I. 緒言

これまで、働き盛りの男性は仕事に打ち込むことで自己実現をはかってきた。その一方で、職住分離が進み、ベッドタウン化した地域社会での活動は減少していったと考えられる。実際に、近隣交流に参加する主体は長期間地域で生活してきた主婦、無職・年金者が多い(柏木, 2008)。今日の地域社会を支えているのは老年期世代と壮年期女性が多く、働き盛りの男性と地域との繋がりは希薄である。地域社会におけるこのような壮年期の男性の欠落化により路上犯罪の多発、男性不在の子育て、家庭も仕事も

地域役割も女性だけにとという男女共同参画社会に逆行した事態があり、壮年期の男性の地域参加が求められている(山岸, 2004)。

多くの働き盛り世代が仕事中心の生活を送っている現状であるが、我々はベッドタウン化している地区において、熱心に地域で活動している30～50歳代の姿を見た。その活動は青少年の育成に関わることであり、活動に参加する子ども達は生き生きとしていた。そして活動する働き盛り世代の姿は力強く精力的であり、活力にあふれていた。

近年は働き盛りである40代前後の世代にうつ病や適応障害など、こころの問題が増加しており、働く人のメンタルヘルス対策が進められている。男性の場合、自分のやってきた仕事や社会的評価が納得できれば、中年期のネガティブな変化はあまり深刻なアイデンティティの問題にならない場合が多いと言われている(岡本, 2005)。しかし、働き盛りである職業人が自ら死を選ぶ傾向が1998年以降強まっており現代の中年職業人男性には重篤な不適応を引き起こす心理的危機が存在することが報告されている

*若桜町役場

*²雲南市役所

*³倉敷中央病院

*⁴松江赤十字病院

*⁵国立病院機構米子医療センター

*⁶松江市立病院

*⁷国家公務員共済連合組合六甲病院

*⁸愛誠会昭南病院

*⁹松江市役所

(松尾, 2007)。このような背景の中でも、働き盛り世代が青少年育成に関わる活動を行っている地区では子どもから大人まで生き生きとしており、活動は地域にもその人自身にも何か良い影響があるのではないかと考えられた。

本研究の目的は働き盛り世代の地域住民が地域において青少年の育成活動に参加する意義を明らかにし、これからの地域づくりについて考察することである。

Ⅱ. 方法

1. 調査対象

対象は、平成20年度の青少年育成部の活動に参加した地域住民9名(男性7名、女性2名、年齢は30～50歳代)全員である。

また、青少年育成部の活動の特長については1年間フィールドワークを行った保健師養成課程学生10名が記載したラベルである。

2. 調査方法

青少年育成部の活動について対象1名に対して研究者2名が個別に30分程度の構造化インタビューを行った。事前に研究の主旨などの倫理的配慮やインタビュー項目を記載した依頼文書を配布し、協力を依頼した。また、聞き取ったインタビュー内容は記録用紙に記載した。

活動の特長については、学生一人5枚以上、一義一文で読んで意味がわかるようにラベルに書き出した。

3. 調査内容

インタビュー項目は青少年育成部の活動を通して感じるやりがいや喜び、自分の変化、今後

の活動に向けた抱負などの10項目である(表1)。

また、青少年育成部の特長としてフィールドワークの中で感じた内容である。

4. 分析方法

それぞれの分析は研究者11名がKJ法を用いて行った。インタビュー記録から、一義一文で中心的意味を簡潔に示すラベルを作成した。次に、そのラベルを意味内容の類似性に従い分類してグループ編成を行った。そして分類したグループを図解化し、その関連を文章化した。分析の信頼性と妥当性に関しては研究者全員で議論を重ねて意見が一致するまで検討した。

同様に青少年育成部の特長についても分析した。

Ⅲ. 倫理的配慮

対象者とコミュニティセンター長に研究の主旨、プライバシーの保護、協力の有・無により利益・不利益はない、研究目的以外に使用しない、報告する際に個人が特定されない、ことなどを文書と口頭で説明し、自由意思による協力を求めた。また、1年間青少年育成活動にフィールドワークとして参加した学生10名は全て研究者に含まれており、各自が合意のもとで行った。

Ⅳ. 対象地区と青少年育成部の概要

対象地区は中心市街地より2～6kmの距離に位置し、面積は5.4km²で、5つの町からなっ

表1 インタビューの項目

1. 今年度(平成20年4月～平成21年3月)参加した活動。
2. 活動に参加している子どもたちがどんな風に育って欲しいか。
3. 活動で、やりがいや喜びを感じる時。
4. 子どもとのかかわりで、大切にしていること・気をつけていること。
5. 活動によって子どもが変わったなと感じたこと。
6. 活動が地域に影響しているなと感じたこと。
7. 活動をしたことでの自分自身の変化。
8. 青少年育成部のメンバーの中での自分の役割。
9. 今後の活動について変えたいと思うところ。
10. 今後の活動に向けて自身の抱負。

表2 対象地区の平成20年と平成12年の世帯数と推計人口

区分	世帯数	平成 20 年度			世帯数	平成 12 年度		
		人口				人口		
		男	女	計		男	女	計
島根県	274, 839	345, 360	379, 842	725, 202	257, 530	363, 994	397, 509	761, 503
出雲市	49, 727	70, 656	76, 620	147, 276	45, 527	70, 404	76, 556	146, 960
対象地区	3, 074	4, 299	4, 525	8, 824	2, 635	3, 717	4, 014	7, 731

表3 対象地区の年齢3区分別人口

	0～14歳	15～64歳	65歳以上
島根県	100,542 (13.5%)	439,471 (59.2%)	201,103 (27.1%)
出雲市	21,34 (14.6%)	89,065 (60.9%)	35,752 (24.4%)
対象地区	1,359 (16.4%)	5,425 (65.6%)	1,447 (17.5%)

表4 対象地区の出生率

	出生数	出生率
島根県	5,885	8.1
出雲市	1,325	9.1
対象地区	およそ100	およそ12.1

ている。近年、地区中央を東西に走る県道の周囲やバイパス道路の周りに商業施設である事業所、商店、大型店舗、公共機関などが進出し、急速に市街化・都市化してきた。市のベッドタウンとして宅地化が進み、アパートやマンションなどの住宅が増加したことが一因となり、世帯数と人口は年々増加している（表2）（しまね情報統計データベース，2009）（出雲市ホームページ，2009）。平成17年度国勢調査によると、この地区の65歳以上の人口が占める割合は17.5%で島根県の27.1%，出雲市の24.4%に比べて少ない（表3）。出生率はおよそ12.1で島根県の8.1，出雲市の9.1に比べて高い（表4）。昔から居住している人と転入してきた人との交流は多くはなく、お互いの生活内容や地域の特徴などを知らない状況にあると思われる。また、都市化に伴い、子どもが家の近所で遊ぶことが減少し、近隣の人々との人間関係が強固なものでは無くなってきている。

そのため、この地区のコミュニティセンターでは子どもを中心とした様々な活動を通して、長年の居住者と転入者とのつながりをつくる活

動が行われている。コミュニティセンターは、地域住民の交流や情報発信の場として機能している。地区内の人とはもとより地区外の人にも、会合やサークル活動などに活用されている。コミュニティセンターの具体的目標は「自然と共生できる住みよい環境と地域づくり」、「心豊かで、明るいたくましい子育てができる地域づくり」、「スポーツと文化学習活動を楽しみ、心身の健康と生きる喜びが実感できる地域づくり」、「だれもがいつまでも安心して暮らせる地域づくり」、「男女共同参画社会の実現と、一人ひとりの人権尊重と思いやりのある地域づくり」の5つである。このコミュニティセンターは運営委員会と事業委員会、事務局によって運営されている。事業委員会には8つの部があり、そのうちの1つに青少年育成部がある（図1）。

青少年育成部は、30～50歳代の人がメンバーとなって活動しており、その中核となっているのが働き盛りの男性である。現在の青少年育成部は、平成14年より青少年部、平成18年より青少年育成子育て支援部となり、平成20年に青少年育成部となった。メンバーは、この地区で生

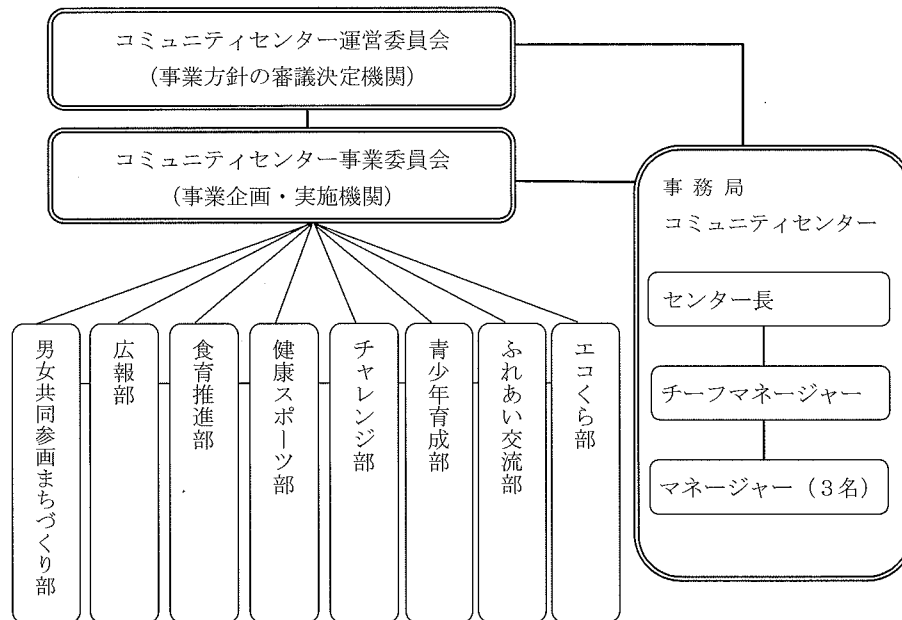


図1 対象地区コミュニティセンターの運営組織図

表5 青少年育成部事業の活動の目的と内容

事業名	目的（期待する効果）	内容
わんぱく塾 ～ものづくり 勤労体験～	<ul style="list-style-type: none"> 子どもたち自らが、米作り・野菜作りに関わり、勤労の苦しみや働くことの大切さ、収穫の喜びを体験することによって、感謝の気持ちや食に対する知識・関心を深める。 労働を通じて、地域の人たちとも交流を図る。 ものづくり、科学教室や昔の遊び体験を実施し創意工夫する能力の増幅を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 川跡地区内の田んぼ、畑を借用し、米作りや野菜作りを行う。作業はできる限り機械に頼らない昔ながらのやり方で行う。 米作り，荒おこし，代掻き作業（4～5月）田植え（5月）稲刈り，収穫（9～10月）餅つき収穫祭（12月） 野菜作り，サツマイモ苗植え（5月）収穫（10月） ものづくり，科学教室，昔の遊び体験 期間：1年間を通して 対象：小学生，保護者
通学合宿 ～コミセン から学校へ 行こう～	<ul style="list-style-type: none"> 異学年で宿泊生活をする事で協力の大切さや自主性，人間力を養う。 日常生活のルールやマナー（あいさつ，整理整頓，時間厳守等）を身につける。 親元を離れて生活することで家族の絆と感謝の気持ちを深める。 地域の方々とふれあいを通して，感謝の気持ちと思いやりの心を育てる。 	<ul style="list-style-type: none"> 炊事，洗濯，掃除などの仕事を分担し，協力し合って共同生活をする。 異学年が互いに話し合い，認め合いながら目標やきまりをつくる生活をする。 期間：3泊4日 会場：コミュニティセンター 対象：小学校5～6年生 約30名 協力者：食育推進部，地域ボランティア，県立大学生等
夏休みサン レイクサマ ー研修	<ul style="list-style-type: none"> 自然の中での研修や宿泊を通して，子どもたちの生きる力を養う。 集団生活を通して，仲間作り，友達の大切さ，協力の大切さを学ぶ。 湖面活動（サバニ），キャンプファイヤー，創作活動など様々な体験を通して豊かな心とたくましい身体をつくる。 	<ul style="list-style-type: none"> 創作活動，湖面活動（サバニ），キャンプファイヤー等 期間：1泊2日 会場：島根県立青少年の家 サンレイク 対象：小学生4～6年生 約40名

まれ育った人だけでなく転入して住むようになった人もいる。任期は2年であるが、継続して活動をしている人がほとんどである。事業内容は勤労体験から感謝の心と食の大切さを学ぶ「わんぱく塾」、コミュニケーションと規則正しい集団生活を学ぶ「通学合宿」、大自然の中で心と体を鍛える「夏休みサンレイクサマー研修」の3つである（表5）。

V. 結果

働き盛り世代である対象が感じている青少年育成に関わる活動の影響を図2に示した。青少年育成部のメンバーは『理想の子ども像』を自分から自然や人に思いやりを持って関わり、地域の中でお互いが支えあっていると分かる子になってほしいと描いていた。メンバーは『活動』することで『自分の変化』に気づき『やりがい・喜び』を感じながら『今後の課題』にも目を向けていた。また、『活動』したことで、参加した子どもや地域に『変化と影響』をもたらしていた（図2）。

『理想の子ども像』は、あいさつができる子、思いやりがある子、素直な子、失敗を恐れずチャレンジできる子が根底にあり、ゴミのポイ捨てをしないなど当たり前のことができる子、地域の中でお互いが支えあっていると分かる子、人や自然と関わるができる子につながっていた。そして、地区に愛着と誇りを持った子になってほしいと願っていた。

『活動』では、メンバーそれぞれが役割を持ってバランスよく取り組んでいた。メンバーは自分も楽しむことを大切にし、子どもの自主性を大切にしながらも必要なときは叱り、子どもの見本となるように心がけていた。

『自分の変化』は、コミュニティセンターに行くようになり、地域の人と顔見知りになったり、知り合いが増えることで地域とつながりができたと感じていた。このようなつながりができたことから、活動を楽しみと思えるようになり、気分転換もできるようになっていた。そうなることで地域の他の活動にも積極的に参加するようになり、地域の役に立ちたいと思うようになっていた。また、子どもに自然と目がいく

ようになり、子どもの見本となるように意識するようになっていた。

『やりがい・喜び』は、子どもと接するとき、子どもの喜ぶ顔を見たときに感じていた。そして、ありがとうと言われたときや顔を覚えてあいさつをしてくれたときに、子どもが地域の中で成長していることを実感していた。これらのことから自分が役に立ったと感じ、仲間と一緒に味わう達成感にもつながっていた。

『変化と影響』は、子どもの変化と地域への影響が考えられた。子どもが変わったと思うことは、地域の人とのつながりができ、あいさつができるようになったり、自主的に動く子どもが多くなるなど、社会性が出来てきたことであった。しかし、9名中4名は変化が見えにくいと感じていた。地域に影響していると感じたことは、活動が地域の人と出会う機会となり、地域の活動に親が参加するようになったことであった。そのことにより親も子どもとの絆を実感するようになり、父親が子育てに参加するきっかけとなっていると感じていた。さらに、活動があることで転入者が早く地域になじみやすい環境となっていると考えていた。しかし、9名中2名はまだ分からないと感じていた。

また、フィールドワークに参加した学生10名が活動の中で感じた、働き盛り世代が地域で行う青少年育成活動の特長を分析した結果、メンバーは、親しみやすく温かい人柄で、お互いを認め合い楽しんで活動し、自分の個性や人生経験を活かしていた。このようにメンバーの『人柄や良好な関係』があり、休日でも地域のために活発に活動することができていた。また、働き盛りであるメンバーはコミュニティセンターの他の部にも必要とされていた。ここでの活動は、子どもたちが普段できない体験や世代間交流の場となっており、活動が充実することで地域の子育てに役立っていた。さらにメンバーの『人柄や良好な関係』と安全に配慮しながら子どもの自主性を大切にしている姿勢は、参加する子どもの親にとっては顔見知りのメンバーに子どもを任せられる安心感につながっていた。

これらの活動に参加する子どもたちは目をキラキラさせて、楽しんでいるように見えた。また、地域の中でも子どもたちは自分からあいさ

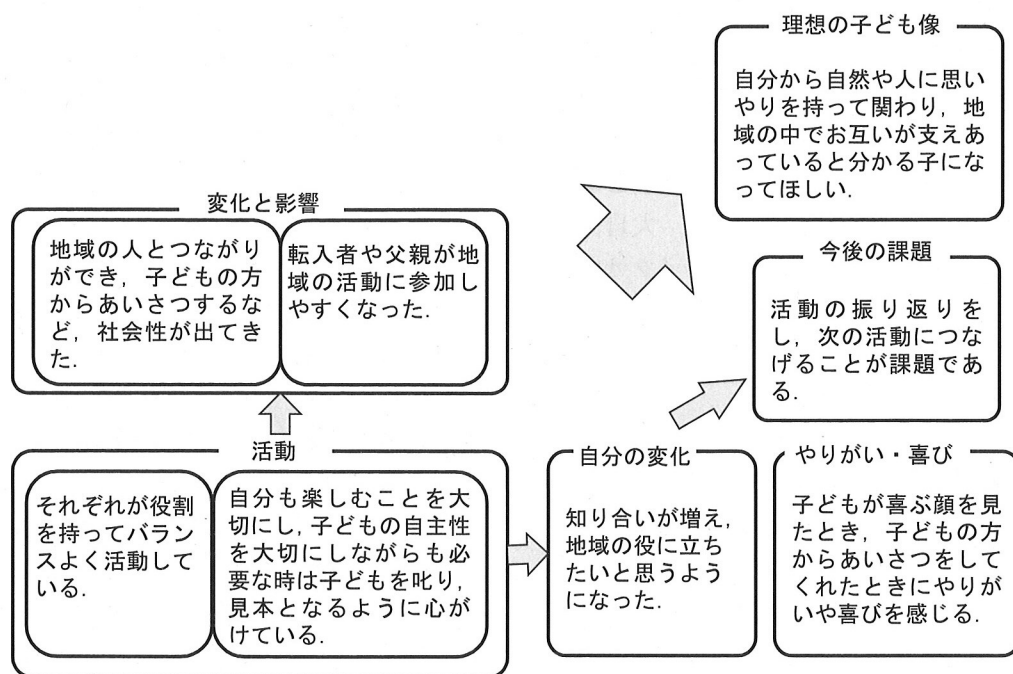


図2 働き盛り世代が感じている活動の影響

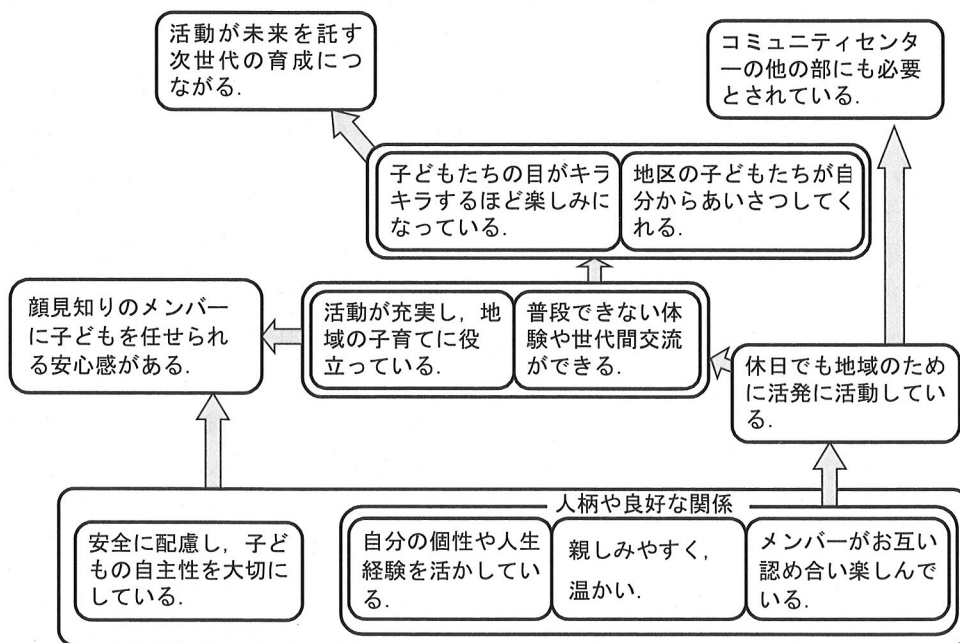


図3 働き盛り世代が地域で行う青少年育成活動の特長

つをすることが多く、未来を託す次世代の育成につながっていた（図3）。

VI. 考察

青少年育成部のメンバーは理想の子ども像を描きながら活動しているが、地域全体で地区に愛着と誇りを持った子を育成することは、その

地域の未来を担っていく人材を育成することでもある。理想像を描きながら、活動の課題にも目を向けており、働き盛り世代のメンバーは明確な目的意識を持って活動を行っていた。義務的に何となく活動しているのではなく、各自がより良い活動を目指しており、問題意識を持ちながら結束している。活動の中では子どもの自主性を尊重しながらも、必要なときは子どもを

叱り、子どもの見本となるように心がけていた。このことは対象が地域の子どもの育てようという強い思いや、地区への愛着を持っているからだと考えられる。このような人材が近所の大人として地域で果たす教育的役割は大きく、今後必要とされている。また、子どもへの影響以外に地域に与える影響としては、転入者や父親の地域活動参加に影響を与えていると自覚していた。働き盛り世代の活動を通して大人も早く地域になじむことができ、地区の特徴に合わせた地域づくりが行われている。働き盛り世代は父親世代でもあり、活動が父親の子育て参加の機会にもなっていると感じている。父親の子育て参加は、コミュニティセンターの具体的目標の一つである男女共同参画社会の実現につながると考える。インタビューでは、自分たちの活動による地域や子どもへの影響について、明確な変化を感じていない者もいた。地域の変化よりも、自分自身の内面的変化をより自覚していることが明らかとなった。青少年を育成する活動の成果はすぐに目に見えるものではない。地域で育った子どもは、いずれはその地域を支えていく人材となる。自然や人、地域を愛する心は世代から世代へと受け継がれ、今後の更なる地域の発展へとつながると推察される。活動を継続していくことが大切である。対象地区では子どもだけでなくメンバー自身も青少年育成部の活動を楽しんでいると感じていた。メンバーがやりがいを持って活動しているため場の雰囲気良くなり、活動内容は充実していく。やりがいは、地域での役割をもち自分が必要とされていると実感することで得られると考えられる。ストレスの多い働き盛り世代にとって、仕事を離れた場所でもやりがいを感じることは、充実した生活を過ごすことにつながる。また、働き盛りの頃から地域で役割を持ち地域社会に参加していると、職場以外でのネットワークが形成されているため退職したときに、うつや閉じこもり防止となる。つまり、働き盛りの人が地域活動に参加することは、現在の生活を充実させるだけでなく、老年期においても地域と関わりを持ち、いきいきと生活することにつながる。人間関係のネットワークをもっていることは人的・物質的援助資源に支えられていることを意味して

いる（岩田，2005）。家族や職業の枠を超える近隣の仲間は悩みや相談を打ち明けられるソーシャルサポートとして機能する。このような仲間と共にやりがいを持って取り組んでいるからこそ、対象地区の働き盛り世代の活動は精力的なのだと考える。青少年育成部のメンバーは自分自身へのプラス効果を実感している。自分自身へのプラス効果と活動の成果には相乗効果がある。活動主体である働き盛り世代が活動を楽しめば楽しむほど、その取り組みは活発となり、その結果、地域社会への貢献度も高くなっていくと考える。

青少年の育成活動を行っているメンバーは自覚していないが、フィールドワークに参加した学生は、活動が世代間交流の機会となっていると感じていた。世代間交流を通して地域の高齢者が役割を持ち、積極的に子どもと関わることは高齢者の生きがいにもなると思われる。高齢者だけでなく、子どもたちにとっても様々な年代の人と関わり普段できない体験をすることは、豊かな人間性を育む機会になる。また、子どもが仲間と共に行動し、いろんな世代と顔と顔を合わせた対面コミュニケーションをとることは家庭内だけでの育成が難しい対人関係能力を培える場にもなる。少子化・核家族化などにより人との関わりが希薄になりつつある中で、社会性を身につける機会ともなっており、人としての成長にもつながると考えられる。子どもたちは、地域の活動を通してあいさつをすることを自然に身につけ、活動の場以外でも声をかけあうことができていた。地域でのあいさつなど、日ごろからのコミュニケーションは、住民同士の連帯感を強め、身近な犯罪の抑止力となり安心して子育てができる地域づくりにもつながると考えられる。働き盛り世代の活動によって、高齢者や子どもの地域での生活はより健やかなものとなっている。

ここでの働き盛り世代の活動拠点は地区のコミュニティセンターである。一般に公民館は、地域資源を地域住民の生活に生かすことのできる場として地域の人すべてが利用できる機関である（永田，2004）。また、地域の人それぞれが、地域を良くしたい、地域のためという目標をもち、活動ができる場ともなっている。コミュ

ニティセンターには活動が人と人をつなげ、地域全体を活性化させる働きがあり、それが地域づくりの基本となっていると考えられる。働き盛り世代の地域活動をはじめ、対象地区コミュニティセンターにおける事業は、様々な年齢でいろんな個性をもつ地域の人がつながって動いている。これらの活動は、活動を行っている住民を成長させ、地域参加への動機付けとなり、生きがいつくりへと進展する。また、地域に育てられた子どもが大人になり、自分が育ったように地域の子育てを行っていき、地域づくりの担い手となることが期待できる。地域は人によってつくられている。そして人を地域が育てようとしている。地域づくりの中心となっているのはコミュニティセンターであり、次世代育成の一端を担うのが働き盛り世代の行っている青少年育成部である。このようにコミュニティセンターを拠点としていることで、PTA活動のような青少年の保護者に限定された子育てではなく、地域の誰でも参加できる子育ての場となっている。成人期の発達課題である「世代性」は次の世代を生み、育み、世話をし、導くことへの参与を指している（鏑, 2002）。対象地区では独身であってもコミュニティを通して地域の子育てに参加することが可能である。そして、自分の子供のみならず、近隣の子供も育て、地域の大人としての育成的・創造的・生産的な関わりが持て存分に能力を発揮できる場となっている。働き盛り世代は地域に求められ、求められることによって与え、与えることによってさらに求められている。その相互的關係の中で停滞や退廃から抜け出し、自分自身の成長や達成感を感じている。次世代の育成を担う活動は、働き盛り世代の発達課題に最も適合しており、能力を活かせる地域活動である。こうして次世代を育成することに喜びを見出し、豊富な知識や経験を活かしながら、自己が活性化した働き盛り世代は老年期になっても、次の世代への深い信頼を持ち自我を統合していく。また、人生を楽しんでいる魅力的な働き盛り世代に育成された子ども達はその背中を見て健やかに育ち、学童から青年へと階段を登るように発達し、ゆくゆくは地域を支える大人になっていく。地域での働き盛り世代の活躍は、仕事以外での社会

的評価を生み出し、アイデンティティの再構築を経て、職業を離れた場での自己実現を可能にするだろう。中年期における希望は、発達課題の達成と関連があると考えられ、自分のためだけに生きることよりも、仕事を通して社会に貢献することや家族のために生きることとより関連しているということが示唆されている（木本, 2005）。しかし、不況が続き会社の倒産や失業など仕事を継続するのが困難で不安定な時代に入った現在では、価値観の変容が起こっており職業は生きがいの対象とはなにくくなってきている（板垣, 2000）。今回調査した働き盛り世代の住民が行う青少年の育成に関わる活動は、地域において中年期の発達課題を達成することができる場となっていた。このように地域における次世代の育成という形で、自己実現を果たし、生きる希望を持つことは、働き盛り世代のメンタルヘルスの保持増進につながると考えられる。

今回、対象地区における働き盛り世代が行う青少年の育成に関わる活動の影響が明らかになった。活動は、子ども・転入者・高齢者・活動する人自身などに良い影響を与えており、今後の生き生きとした地域づくりのきっかけになると考えられる。本研究では支援した子どもたちがどう感じ、どのように成長したのかを明らかにできていない。子どもたちの視点から働き盛り世代が行う活動の影響を明らかにすることで、その意義がより明確になると考えられた。また、今回の調査は一地区の限られた人数を対象としており普遍性に限界があるため、引続き対象を広げて検討する必要がある。

V. 結論

地域において働き盛り世代が青少年の育成活動に参加することは、活動対象となる子どもだけでなく地域住民や活動する働き盛り世代自身にも良い影響を与えていた。このような活動は今後の生き生きとした地域づくりのきっかけになると考えられる。

謝辞

本研究を行うにあたり対象地区の青少年育成部の皆様には、お忙しい中インタビューに快く答えて頂き、深く感謝しております。また、地区活動にあたりコミュニティセンター長鐘築伸正様、チーフ・マネージャー坂本君代様をはじめ、ご協力して頂きました皆様方に厚く御礼申し上げます。

文献

- 出雲市ホームページ (2009)：出雲市の人口・世帯数の推移, 2009-08-19, <http://www.city.izumo.shimane.jp/icity/browser?ActionCode=content&ContentID=1184811146603&SiteID=0&ParentGenre=10000000000029>
- 板垣恵子, 渡辺 喜勝 (2000)：現代社会を生きる人々の生きがい, 東北大学医療技術短期大学部紀要, 9(2), 257-266
- 岩田紀 (2005)：現代社会の環境ストレス, 106-108, ナカニシヤ出版, 京都.
- 岡本祐子 (2005)：成人期の危機と心理臨床－壮年期に灯る危険信号とその援助－67-69, ゆまに書房, 東京.
- 柏木雄介, 村本研三, 丁志映, 小林秀樹 (2008)：居住者の生活指向と地域参加の關係に関する研究その1－地域活動への参加と回答者属性關係に着目して－, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 1043-1044
- 木本陽子 (2005)：中年期の「希望」の心理について, 臨床教育心理学研究, 31(1), 77-82
- しまね情報統計データベース (2009)：第2表 年別人口動態, 2009-8-19, <http://pref.shimane-toukei.jp/upload/user/00013222-3NPBTs.xls>
- 鑑幹八郎 (2002)：アイデンティティとライフサイクル論, 170, ナカニシヤ出版, 京都.
- 永田香織 (2004)：地域の共同性をつくる地域公民館の役割－今津福祉村の組織化と活動の展開－, 九州大学大学院教育学コース院生論文集, 4, 51－56.

松尾洋平, 渡辺三枝子 (2007)：現代の中年職業人が抱く不安感と心理的危機, 経営行動科学, 20(2), 155-168.

山岸治男, 有田憲仁 (2004)：壮年期男性の社会参加と地域形成－「親父たちの夜なべ談義」(大分市南部公民館)を事例に－, 大分大学生涯学習教育研究センター紀要, 4, 63-70.

石橋 鮎美・有田真由美・板垣美由紀・稲岡奈なえ・岩崎 寛子・岩崎 由恵
大塚 蓉子・片山 周子・上平瀬さおり・久保田恵理・吾郷美奈恵

Meaning That Generation of in the Prime of Life Participate in Regional Youth Development Activities

Ayumi ISHIBASHI, Mayumi ARITA^{*}, Miyuki ITAGAKI^{*2}, Nanae INAOKA^{*3}, Hiroko IWASAKI^{*4},
Yoshie IWASAKI^{*5}, Yoko OTUKA^{*6}, Chikako KTAYAMA^{*7},
Saori KAMIHIRASE^{*8}, Eri KUBOTA^{*9} and Minae AGO

Key Words and Phrases : In the prime of life, Community, developmental task

^{*}Wakasa Town Office

^{*2}Unnan City Office

^{*3}Kurashiki Central Hospital

^{*4}Matsue Red Cross Hospital.

^{*5}Yonago Medical Center

^{*6}Matsue City Hospital

^{*7}Rokkou Hospital

^{*8}Aiseikai Shonan Hospital

^{*9}Matsue City office